

令和 4 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）  
分担研究報告書  
相談支援専門員とサービス管理責任者及び児童発達支援管理責任者の連携に関する  
評価ツールの開発のための研究

「連携評価ツールの質的評価検証」

研究分担者 鈴木 和 北海道医療大学

研究要旨

開発した連携評価ツールについて研修会方式の取り組みを行い、連携評価ツールの説明、活用体験、意見交換を実施した。参加者は、対面、オンライン、オンデマンド方式で 121 名の参加が得られた。研修会終了後にアンケート調査を行ったところ 35 名の回答を得ることができた。ツールについて今後の業務に活用できると思うかの問いでは「思う」21 名「少し思う」10 名と活用に向きなものが多かった。また、今後活用してみようと思うかについては、「思う」14 名「少し思う」18 名の回答を得ることができ、ツールの実践活用に関連した一定の評価を確認することができた。

A. 研究目的

本研究では、開発した連携評価ツールについて、研修会方式にて連携評価ツールの説明、活用体験後、意見交換を実施して、ツールの活用に関する評価を得ることを目的とした。

B. 研究方法

北海道内にて勤務している相談支援専門員とサービス管理責任者及び児童発達支援管理責任者（以下サビ児管）を主な対象として、2023 年 3 月に研修会を実施し、アンケート調査を行った。

研修会は対面実施を基本としたが、参加しやすくなるよう、オンライン方式の参加、オンデマンド方式の視聴も可能とした。対面・オンライン参加者は、評価ツールの説明と合わせてグループワークも実施をした。

対象参加者の募集は、北海道地域の対象となる専門職が所属する事業所を、北海道が公開している登録事業者一覧からランダムサンプリングを行い郵送にて案内を送付した。また、専門職に関係する団体等を通して周知を依頼した。

研修会の内容としては、全国調査に関する報告、評価ツールの説明、評価ツール活用体験（演習）、グループ意見交換（対面・オンライン参加者のみ）、全体報告（対面・オンライン参加者のみ）であった。

研修会終了後にアンケート調査を実施、アンケートの主な内容は、職種や年齢などの基本情報、現在専門職間の連携について課題を感じているか、研修会の内容は今後の業務に活用できるか、ツールに関する理解度、ツールに関する今後の活用について、などとして、主に 5 段階での回答を求めた。

(倫理面への配慮)

本研究は、北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理審査委員会による審査の上、所属機関長による承認を得て実施した。(23N001001)

### C. 研究結果

実施した研修会は対面、オンライン、オンデマンド方式で 121 名の参加であった。

アンケート調査は、35 名から回答が得られた。回答者は、相談支援専門員 14 名、サービス管理責任者 10 名、児童発達支援管理責任者 4 名、その他 11 名であった。回答者の年代は、40 歳代が 14 名と最も多く、30 歳代 10 名、50 歳代 9 名、60 歳以上・20 歳代それぞれ 1 名となっていた。

アンケート各項目の回答についてみていくと、「現在、専門職間の連携について課題を感じていますか」では、「とても感じている」「少し感じている」がともに 45.7% (16 名) となっていた。(図 1)

「報告・研修会の内容は今後の業務に活用できると思いますか」では、「思う」が 60% (21 名) と最も多く、「少し思う」28.6% (10 名)、「どちらともいえない」11.4% (4 名) と続いていた。(図 2)

「連携評価ツールを今後活用してみようと思いますか」では、「少し思う」が 51.4% (18 名) と最も多く、「思う」40% (14 名)、「どちらともいえない」8.6% (3 名) と続いていた。(図 3)

連携評価ツールに関する意見(自由記述)では、「自分にとって足りない部分や、改善点がわかった」「相談支援専門員とサビ児管との関係性におけるリテラシーについて議

論を深めると良いと考えさせられた」「連携ツールについては、『見える化』出来ているところは非常に良い事」「本来業務の確認のきっかけになる」「入力も PC であれば簡単で、結果も即時出るところはストレスなく入力が出来た」といった肯定的な評価が多く挙げられていた。また、実際活用してみたことで、「連携はできているのではないかと、漠然に思っていたが、弱い点を明確にすることができた」といった活用効果に関する意見も見られた。一方で、「オンラインで気軽に入力でき、入力後にグラフが出る方式だと、もっと気軽に入力できる」「もう少しコンパクトになると取り組みやすい」「自己評価の結果、関係機関連携におけるアドバイスの的なものが表示されると更に次の課題に向けた動き出しに繋がるかと思った」といった今後の改善に向けた意見も得ることができた。

### D. 考察

研修会形式にて連携評価ツールを説明・実践して、アンケート調査から評価を進めたところ、今後の業務等への活用に関して前向きな回答が多く、本ツールは実践現場においても一定程度活用可能なものと評価できると考える。また、自由記述においても、本ツールをきっかけとして、連携の意識化や業務の確認につながるといった意見がみられ、評価ツールを通した支援の質の向上にもつながる点が示唆された。一方で、記入項目数や入力システムへの意見などさらなる改善に向けた評価も得ることができた。

### E. 結論

開発した連携評価ツールの活用について

一定の評価を得ることができた。また、より良いツールとしていくための今後に向けた示唆も得ることができた。継続して改定への取り組みが望まれる。また、今回実施した研修会のような形で、ツールの活用について具体的に情報発信することも継続的に必要であると考ええる。

F. 健康危険情報

特記事項なし

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

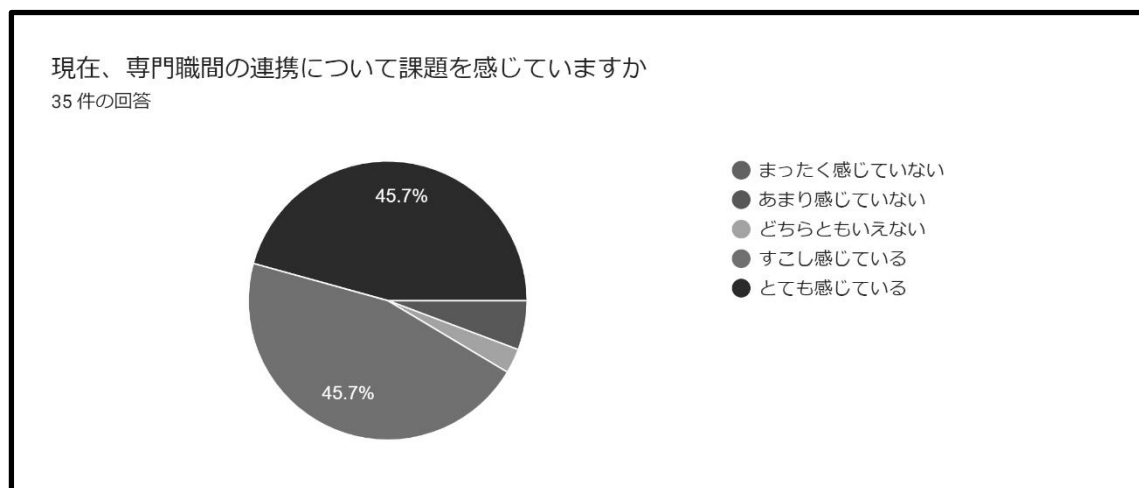


図 1

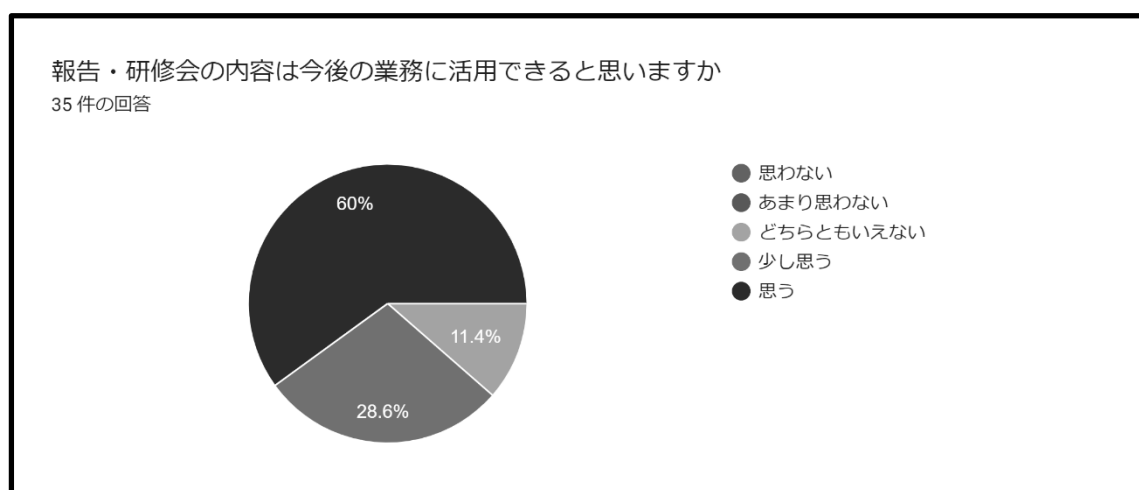


図 2

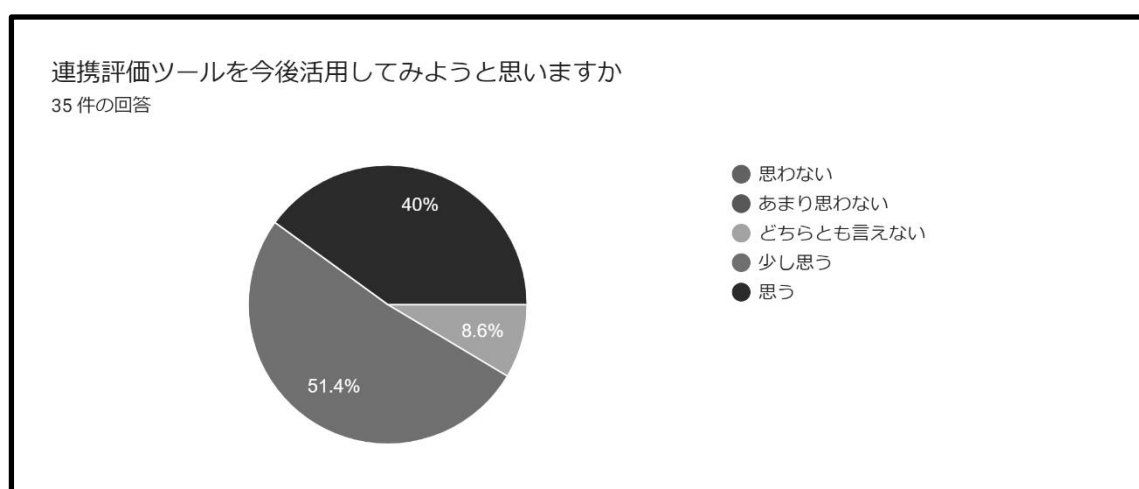


図 3